様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００００３６

研究課題名（和文）情動と出来事の現象学的相関についての基礎研究

研究課題名（英文）Phenomenological research on the affect-event correlation

研究代表者
伊原木　大祐（Ibaragi, Daisuke）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：３０５１１６５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究では、主に近現代哲学が認識論の枠組みとして利用してきた「主観‐客観」、「志向作用‐志向対象」といった相関関係に代え、新たに「情動‐出来事」という対を現象性の基本構造として提起している。研究の進展につれて、この相関関係が宗教体験の生成を説明するのに有効であることが判明した。そうした着想の源にあるのは、日本の宗教哲学者である石津照璽と武内義範の思想であるが、その再発見と再評価もまた本研究の重要な成果の一つである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
死や病苦、さらに戦争・災害やパンデミックといった、そのつど特殊な偶発事でありながら人間存在にとって普遍的かつ本質的な危機は、広く社会不安の源となってきただけでなく、古今の哲学・宗教思想を長らく触発してきたテーマでもある。本研究は、こうした論点に関して、新たな認識論的モデルを提起することで一定の哲学的理論化を試みるものであるが、それは個人的・社会的な危機状況の受け止め方を変えてゆくことにも役立つと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study proposes a new pair of affect-event as the basic structure of phenomenality, replacing correlations such as subject-object and noesis-noema, which modern philosophy has mainly used to present an epistemological framework. As the research progressed, this new correlation proved to be effective in explaining the generation of religious experiences. The source of such inspiration lies in the ideas of two Japanese philosophers of religion, Teruji Ishizu and Yoshinori Takeuchi. The rediscovery and reappraisal of their thought is another important outcome of this study.

研究分野：宗教哲学

キーワード：出来事　情動　宗教体験　危機　宗教哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

イギリスの哲学者ホワイトヘッドによる「プロセス哲学（Process philosophy）」や、ドイツの哲学者ハイデガーによる「生起／性起（Ereignis）」論に直近の起源をもつと考えられる「出来事」という概念は、二十世紀後半のフランス哲学思想に多大な影響を及ぼしてきた（その古代における源泉としてストア派の哲学が挙げられるが、ここではとくに考慮しない）。たとえば、ポスト構造主義の世代を代表するドゥルーズと、その後の世代に属するバディウは、いずれもこの概念を用いながら独自の思想体系を考案している（Gilles Deleuze, *Logique du sens*, 1969; Alain Badiou, *L'Être et l'Événement*, 1988）。だが、それ以上に明瞭かつ繊細な仕方で「出来事」の思想を展開したのが、フランスの現象学者たちである。とりわけマルディネは、シュトラウスの著作『出来事と体験』（Erwin Straus, *Geschenis und Erlebnis*, 1930）を起点として、「出来事の現象学」とでも呼ぶべきものを創設した（Henri Maldiney, *Penser l'homme et la folie*, 1991）。その後、ロマーノは、ハイデガーとの対決を踏まえて個性的な「出来事論的解釈学」を提案し（Claude Romano, *L'événement et le monde*, 1998）、これに先行するマリオンもまた、自らが提唱する「与えの現象学」の内部に「出来事」という現象概念を組み込んでゆく（Jean-Luc Marion, *Étant donné*, 1997）。出来事の概念系がマリオンのその後の思想的発展において重要な位置を占めているというのは、けっして偶然ではない。たとえば、カール・バルトの神学において「出来事（Ereignis）」が決定的な概念であったように、そもそもキリスト教自体が、十字架の出来事を礎とした宗教である以上、この問題から逃れることはできないのである。実際、近年のマリオンが総合的に打ち出した啓示論（*D'ailleurs, la révélation*, 2020）も、そうした神学的背景を十分に意識している。こうした観点から、われわれは現代の宗教哲学、とりわけキリスト教との対決を踏まえた哲学思想の独自性と意義を（再）理解できるのではないか、という見通しが生まれてきた。ただし、出来事はそれ自体でただ単独に成立するわけではない。出来事がたんに客観的で宙に浮いた観念としてではなく、真に出来事として体験されるには、その出来事を受容する媒体がなくてはならない。この媒体を「情動」ないし「情感性」として捉えることにより、本研究以前に蓄積してきた一連のフランス現象学研究（とりわけミシェル・アンリにおける「生の現象学」の研究）を当該の問題に接合することができる。その結果、出来事を情動との相関において捉え、そのうえでこの相関関係が実際どのように機能しているのかを検討するという研究上の動因が生じてきた。以上が本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

従来の哲学理論においては、対象の認識を成立させる契機として、感性のほか、悟性や知性などの精神的機能に大きな比重が置かれてきた。これに対し、出来事の受容は、情動をその特権的な対応項としており、これはいわゆる感性よりも深い次元に位置する。出来事は、この情動を通してこそ初めて出来事としての「意味」をなすと考えられる。本研究の主要な目的は、出来事‐情動という新たなタイプの相関関係を一種の「仮名（prajñapti）」として――したがって究極的には絶対化・実体化できないものとして――想定し、この仮設した相関に基づいて現象の発生構造を説明する点にある。なお、現象学の文脈における「相関（Korrelation）」とは一般に、認識作用と認識内容との機能的対応関係を意味するものであるが、ここではそれを転じて別種の対応関係の術語として用いる。以上のような文脈から当初狙っていた議論は、以下に挙げる２点となる。

（１）「情動‐出来事」相関から見た既存理論の批判的検討。たとえば、出来事の現象学的分析に着手しているマリオンとロマーノは、出来事に巻き込まれる人間存在の様態を、それぞれ「没頭者（adonné）」、「到来者（advenant）」と名づけ、それらを伝統的な「主体」に代わるものとした。しかしながら、後者の概念（到来者）にあっては、出来事に対する従属的位置がもっぱら強調され、情動の積極的役割が背景に退いてしまっている。また、前者の概念（没頭者）は、より一般的な現象授与の問題構成に解消されており、自己情動性を表す現象概念として提示された「肉」との関係性が不明瞭になっている。こうした面での欠陥を補うためにも、「出来事」分析を深化させてゆく過程で、その「情動」面への連結を最大限に重視することが、本研究の目指す第一の目標となる。

（２）「情動‐出来事」相関の宗教哲学的応用。上に挙げたマルディネは、シュトラウスだけでなくビンスワンガー、ソンディの現存在分析といった、主として精神病理学の領域を素材としつつ、自らの出来事概念を洗練・発展させていた。これに対して、本研究では、最終的にこの相関を啓示・奇跡・儀礼といった範例的な宗教現象の領域に適用することで、その哲学的解明に寄与することが狙われる。こうした地点から新しいタイプの宗教哲学を立ち上げるというのが、本研究が初発段階で想定していた第二の目標である。

３．研究の方法

（１）現代フランス現象学の分野における「出来事」概念の基本的な意味と動機を、ロマーノとマリオンの諸研究を手がかりとしながら把握する。その過程で、なぜこうした「出来事」が「情動」によって保証されることになるのかについて、具体的な事例を踏まえながら理解する。本研究では、出来事に対応した情動概念を抽出するにあたって、ミシェル・アンリによる生の現象学が展開している「情感性」論を参照することになる。さらに、それを引き継いだマリオンの「肉」という概念をも考慮に入れる。出来事に対応すべき情動が、超越的な構造契機をはらんだ「超受容性」といったものではなく、より根底的で内在的な「自己触発」構造をもつ点を重視しながら、研究を進めていく。

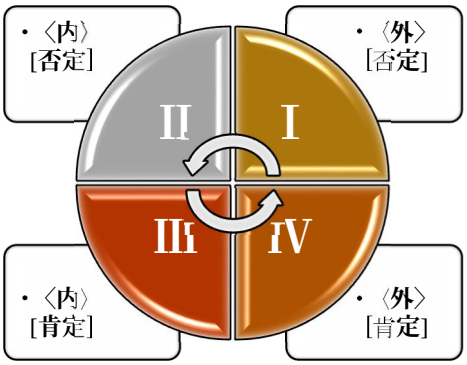
（２）「情動‐出来事」相関の具体的適用。上記（１）の方法を経て深められた「情動‐出来事」相関の性質を利用して、宗教現象の分析と理論構築を試みる。宗教学でも広義の「聖性」や「神性」について多様な言説が見られるが、これにまつわる現象を情動‐出来事の立場から分析することで、神学や神話学による解釈とは異なる仕方での了解が可能となる。ここでは、出来事の概念を踏まえたマリオンのキリスト論を参照するが、議論がキリスト教に偏らないよう、武内義範が論考「宗教哲学」の中で提示した「非日常的事件」という考え方を援用し、それを情動面から裏付ける形で当該相関の有効性を検証する。

４．研究成果

（１）本研究開始以前から引き継いだ議論を踏まえ、アンリによるショーペンハウアー読解およびニーチェ読解を手がかりとしつつ、情感性概念の豊穣な可能性に基づいて「情動」面の解明を前進させている。「『精神分析の系譜』再読（１）――ショーペンハウアーとニーチェをめぐって」をテーマとしたシンポジウム内での発表「苦しみから共苦へ――生の現象学と意志の哲学」、また、「ショーペンハウアーの新世紀」をテーマとした国際会議での発表「In Search of the Essence of Life: Henry's Reading of Schopenhauer」はとくにこの側面の分析に専心したものである。一定の成果ではあるが、もう一方の出来事面の分析については、その後の研究に持ち越された。

（２）『宗教史学論叢 26　越境する宗教史（下巻）』に寄せた論考「異端表象の哲学的利用――宗教史から反歴史へ」では、近現代の哲学者たちによる古代の異端者マルキオンの象徴的利用を踏まえつつ、ショーペンハウアー、シモーヌ・ヴェイユ、エルンスト・ブロッホの思想の宗教史的読解を試みた。異端思想を包含した新たな宗教史理解の手法を導きの糸とし、他方でベンヤミンとの異同を意識しつつ、エルンスト・ブロッホの大胆な異端解釈・宗教理解と彼の固有概念である「新事象（Novum）」というモチーフを検討する中で、「出来事（event）」論の増強を図った。さらにこの新奇な出来事としての側面は、必然的に情動の問題と接合されざるを得ないことを強調している。具体的に挙げられているのは、マルキオンの失われた著作『反対命題』の冒頭部にあったといわれる言葉「おお、奇跡を超えた奇跡、恍惚、力と驚き」である。ブロッホはこれを「真の歓び」・「もっとも強烈な歓び」として捉えている。

（３）現象学的な出来事の概念をマリオン、ロマーノからマルディネへと遡って考察する中で、こうした考え方にきわめて近い理論構成を武内義範の宗教作用論に見いだすに至った。この議論は、超越や祈りといった別の契機を付加する点で、本研究の対象とする相関関係を超えた包括的な射程をもっているが、その差異よりも類似に着目することで宗教現象に対する新しい理解の枠組みが可能になる。日本宗教学会の学術大会で発表した「武内義範の宗教作用論に関する一考察」は、この問題を掘り下げた成果の一つである。武内は、筑摩書房から刊行された『哲学講座』第六巻「哲学の諸部門」のうち、「宗教哲学」という項目に寄せられた文章の中で、必ずしも仏教には限定されない包括的な宗教作用論を提起した。そこで定められた作用類型とは、「非日常的事件と日常的生」（Ⅰ）・「宗教的不安」（Ⅱ）・「世界超越の作用」（Ⅲ）・「祈り」（Ⅳ）の４つである。これを武内の図式に則って表したものが、下図となる（『武内義範著作集第四巻』10 頁右上の図を一部改変）。非日常的事件によって攪乱された日常的生の秩序（Ⅰ）は、（Ⅱ）の不安から（Ⅲ）の超越作用に至るプロセスを経て、（Ⅳ）の「祈り」によって超越者に充たされつつ回復する。ただし、その最後の段階では、生の秩序がより高次の新たな秩序となって回復されていることから、武内はこれを「日常性」から区別して「平常性」と呼ぶ（ここには平常心のような言葉の反響がある）。四つの作用はまた、外／内（左右の横軸）、否定／肯定（上下の縦軸）という二種の対立軸を含んでいる。右側に位置するⅠとⅣは、ともに生の「外」からの超越的作用を表すが、これに対する生の「内」からの反応が左側のⅡとⅢで



ある。だが、他方の軸から見ると、上側のⅠとⅡは日常的な生を襲う「否定的な力」であり、下側のⅢとⅣは否定の否定として回復された生の「肯定的な力」である。本研究で想定していた「情動‐出来事」相関は、武内が詳述したⅡ（宗教的不安）を構成する多様な要素――武内自身はそこで困惑・驚異・畏怖・激情・悲痛・苦悩といった情動を挙げている――と、Ⅰの「非日常的事件」との連結に相当すると考えられる。

（４）上記のような分析を経ることで、本研究の当初の立脚点に関して、根本的な疑問点が浮かんできた。とりわけそれは、「出来事」という概念を（ある意味で凡庸かつ日常的な）「現象」として捉えるという、マリオン‐ロマーノ的な見解に対する批判となって現れる。普遍的な現象理論を目ざして、出来事の概念を一般化・普遍化（凡庸化）することは、かえってこの概念の特殊な価値を損なうことなのではないか。出来事＝事件は、むしろ武内が想定していたように、根本的に異常な「非日常性」において扱われるべきではないか。そうした見地から、武内と似たような議論をまったく別の道具立てで展開している日本の宗教哲学者・石津照璽（1903―1972）の理論が、本研究の新たな核となって登場してきた。

（５）論文「日本の宗教哲学における限界状況の分析」（未刊）で詳述したように、石津の宗教哲学は、宗教経験の根源的機制を、生への危機的状況が自己への他者性・拒否性として現れてくる場面に看取するものである。中でも興味深いのは、人類学者マリノウスキーの議論を受けて、環境に対する主体の適応や調節という機能性に基づいて、人間存在を再考するという議論の方向性である。そこでは、第一次環境（自然環境）および第二次環境（文化環境）へのあらゆる適応が不可能になった状態――すなわち、最終的には環境への「不適応」――を人間がどのように克服するかが重要な課題となる。大前提として、人間の生活には欲求の充足が不可欠である。機能主義の観点から言えば、生には基本的欲求と派生的欲求の充足が必要となる。しかし、第一次環境では自然の物質や力の限界によって、また第二次環境では経済的、政治的、法的、道徳的、技術的な種々の制約によって、人間の行為が妨げられる機会はきわめて多い。それゆえ、これらの欲求を包括的に充足することはほとんど不可能になってくる。そこにこそ、石津は葛藤や挫折の根源を見いだす。このような葛藤の限界を超えると、生命体は何らのニーズも満たせない破滅に直面するだろう。とはいえ、そうした究極的な限界状況においてもなお、生命体は生き延びるために必死に努力し、適応のために極端な選別的関心を用いることで、特定の価値観に支配されるようになる（「溺れる者は藁をもつかむ」）。この価値観こそが、宗教や呪術の機能へと紐づけられるのである。以上のような石津の理解は、本研究が仮設した「情動‐出来事」の相関を破壊するものではけっしてなく、むしろそれを補強するものであるが、その仮設に修正を促す論点が少なくとも一つは潜んでいる。それは、出来事の概念が危機の概念へと種別化されうるという点である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊原木 大祐	４．巻 10
２．論文標題 共苦の力　ショーペンハウアー、ニーチェ、生の現象学	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ミシェル・アンリ研究	６．最初と最後の頁 23～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.10.0_23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊原木 大祐	４．巻 下巻
２．論文標題 異端表象の哲学的利用　宗教史から反歴史へ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 越境する宗教史	６．最初と最後の頁 45～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊原木 大祐	４．巻 9
２．論文標題 マリオンとアンリ、肉への二つのアプローチ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ミシェル・アンリ研究	６．最初と最後の頁 97～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.9.0_97	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 伊原木大祐
２．発表標題 苦しみから共苦へ――生の現象学と意志の哲学
３．学会等名 日本ミシェル・アンリ学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Daisuke Ibaragi
２．発表標題 In Search of the Essence of Life: Henry’s Reading of Schopenhauer
３．学会等名 4th International Conference: The New Century of Schopenhauer（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊原木大祐
２．発表標題 武内義範の宗教作用論に関する一考察
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

項目「アンリ」・「ヴァール」『ハイデガー事典』昭和堂、2021年。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関